

オープン
カレッジ

2026年3月25日、大府市で2件の文化財が市指定文化財となった。1件は、江戸時代後期の「三山道中記」という古文書で、著者・平七をはじめとする13人の大府村の村人が、日本三霊山(白山・立山・富士山)を巡拝し、それと合わせて江戸・日光・鎌倉などを訪れた51日間の旅の記録が記された資料である。

市内の桃山公園には、旅の帰着を記念して建てられたと考えられる巡拝塔も残り、古文書と合わせて文化財に指定された。もう1件は、現在、普門寺(大府市

大府市の新文化財指定に寄せて

れた仏像の1体である。大府市で仏像が文化財に指定されるのは8件目で、1986年に指定された延命寺(大東町)の阿弥陀如来坐像(平安時代後期)以来、およそ40年ぶりとなる。

こう書くとその間、何もしていなかったと思われるかもしれないが、89年には「大府市誌 資料編 宗教」が刊行され、その後も文化財保護委員会を中心に市内寺院の調査が実施され、2018年にはその成果の参拝者がこの3体の文化財に接する機会となった。



普門寺の木造阿弥陀如来坐像

一方、大府市では今年2月、江戸時代から継承されてきた庚申講(こうしんこう)が、高齢

江戸期の三霊山旅行記と平安期の阿弥陀如来像

横根町)に安置されている木造阿弥陀如来坐像で、平安時代後期の作品である。この仏像は、近年まで同じ町内の薬師寺に祀られていたが、寺が無住となり移さ



岡山大学大学院文学研究科博士
見田 隆鑑

果をまとめた冊子「大府市の仏像」が刊行されている。筆者らが大府市歴史民俗資料館とともに17年から制作・公開している大府市仏像シリーズという映像アーカイブも、前提となる文化財調査を通して、行政と寺院の間に信頼関係が育まれていたことで可能になったものであり、今回の文化財指定もこれまで地道に続けられてきた地域の文化財保護活動の成果と言える。

普門寺にはもともと市指定文化財の秘仏・十一面観音菩薩立像(平安時代中期)が祀られてきたが、薬師寺から秘仏・薬師如来立像(市指定文化財・平安時代後期)が祀られることになり、薬師如来像とともに移動した阿弥陀如来像も今回文化財に指定されたことで、3体の指定文化財が1カ所に集まる形となった。

同寺では5月3日と4日に17年ぶりに秘仏・十一面観音の御開帳が行われ、多くの人々の参拝者がこの3体の文化財に接する機会となった。

化や後継者不足から幕を閉じた。そこで用いられた掛け軸や道具類は資料館に寄付され、今後も保存・活用される見込みだが、地域社会の変化の中、少しずつ失われていく文化が存在することも現実である。先の仏像のように、形あるものは本来の場所を失っても、伝えていく場所や人がいれば残せるが、民間の行事は、関わる人の数やつながりが維持されなければ継承は難しい。さまざまな文化財は、単に過去のものではなく、地域の歴史・文化の姿を現在、そして未来に伝えることができる大切な情報源である。そして、それらを未来につないでいけるのは、今を生きる私たちである。

みた・たかあき 専門は美術史学。名古屋大学大学院文学研究科博士。後期課程満期退学。博士(文学)。